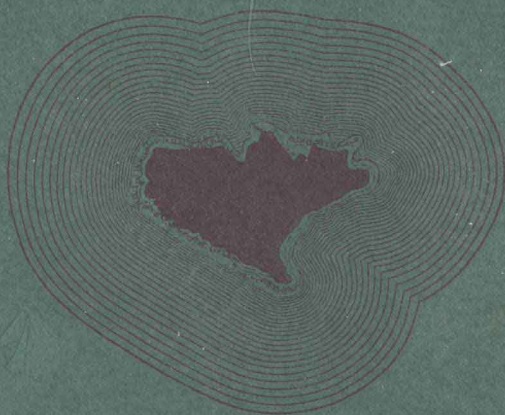


青春の屈折

上

全集・現代文学の発見
第十四卷

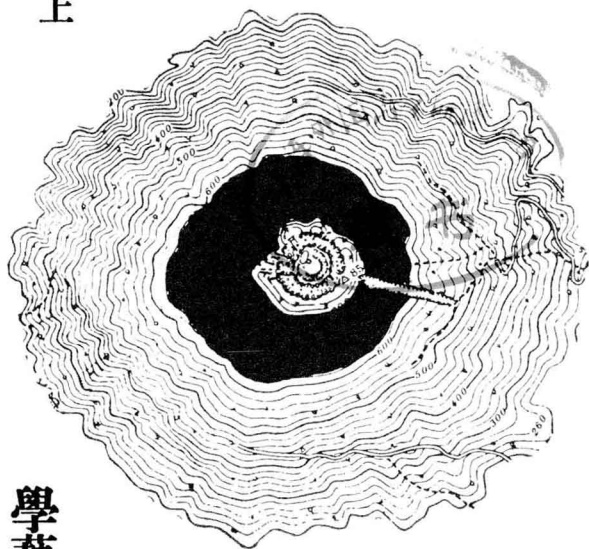
学苑書林



全集・現代文学の発見・第十四卷

青春の屈折

上



學藝書林

全集・現代文学の発見 第十四卷

青春の屈折（上）

著者代表Ⅱ伊藤 整 ©

編集者Ⅱ八木岡英治

発行者Ⅱ岡田廣

印刷者Ⅱ和田彰三

発行所Ⅱ株式会社 學藝書林

東京都中央区西八丁堀二の十 振替東京一〇八二一

印刷・製本Ⅱ東洋印刷

昭和四十三年七月十日第一刷発行 七五〇円

送料九〇円

落丁・乱丁はお取り替えます

目

次

梶井基次郎

冬の蠅 Ⅱ 9

中島 敦

めかれおん日記 Ⅱ 19

堀 辰雄

恢復期 Ⅱ 39

伊藤 整

若い詩人の肖像 Ⅱ 57

中野重治

歌のわかれ Ⅱ 93

高見 順

故旧忘れ得べき 161

坂口安吾

古都 289 真珠 304

太宰 治

ダス・ゲマイネ 315

檀 一雄

花筐 337

立原道造

萱草に寄す 361

井上立士

編隊飛行 Ⅱ
375

田宮虎彦

琵琶湖疏水 Ⅱ
433

西原 啓

焦土 Ⅱ
449

きけわだつみの声 Ⅱ
487

長田 弘

解説 Ⅱ
515

裝
本
栗
津
潔

青春の屈折
(上)

梶井基次郎 「冬の蠅」

かじい・もとじろう 一九〇一—一九
三二。大阪に生れ、旧制三高理科に入
学。胸部疾患と近代デカダンスの浸蝕を
受けつつ習作を発表。在学五年にして卒
業、東大英文科へ。同人誌「青空」に
「檸檬」を発表。「城のある町にて」以下
の諸作は、死後ようやく正当な評価をか
ちえた。結核再発のため卒業を断念、伊
豆に転地。川端康成を知る。一方社会科
学への関心を深めるが、実作ではきびし
い自己凝視の上に、実在的に問題を開示
する傾向を深めた。ほとんど無名のまま
夭折。

冬の蠅

冬の蠅とは何か？

よぼよぼと歩いている蠅。指を近づけても逃げない蠅。そして飛べないのかと思つていたりやはり飛ぶ蠅。彼等は一体何処で夏頃の不逞さや憎々しいほどのすばしこさを失つて来るのだらう。色は不鮮明に黴んで、翅体は萎縮している。汚い臓物で張切つていた腹は紙撚のように瘦せ細つてゐる。そんな彼等がわれわれの氣もつかないような夜具の上などを、いじけ衰えた姿で匍つてゐるのである。

冬から早春にかけて、人は一度ならずそんな蠅を見たにちがいない。それが冬の蠅である。私はいま、この冬の私の部屋に棲んでいた彼等から一篇の小説を書こうとしてゐる。

1

冬が来て私は日光浴をやりはじめた。溪間の温泉宿なので日が翳り易い。溪の風景は朝遅くまでは日影がなかに澄んでゐる。やつと十時頃溪向うの山に堰きとれていた

日光が閃々と私の窓を射はじめる。窓を開けて仰ぐと、溪の空は虹や蜂の光点が忙がしく飛び交つてゐる。白く輝いた蜘蛛の絲が弓形に膨らんで幾条も幾条も流れてゆく。

(その絲の上には、何という小さな天女！ 蜘蛛が乗つてゐるのである。彼等はそうして自分の身体を溪の此方岸から彼方岸へ運ぶものらしい)。昆虫。昆虫。初冬といつても彼等の活動は空に織るようである。日光が櫂の梢に染まりはじめる。するとその梢から白い水蒸氣のようなものが立騰る。霜が溶けるのだらうか。溶けた霜が蒸発するのだらうか。いや、それも昆虫である。微粒子のような羽虫がそんな風に群がっている。そこへ日が当たつたのである。

私は開け放つた窓のなかで半裸体の身体を晒しながら、そうした内湾のように賑やかな溪の空を眺めている。すると彼等がやつて来るのである。彼等のやつて来るのは私の部屋の天井からである。日蔭ではよぼよぼとしてゐる彼等は日なたのなかへ下りて来るやよみがえつたように活気づく。私の脛へひやりととまったり、両脚を挙げて腋の下を搔くような模ねをしたり手を摩りあわせたり、かと思うと弱よわしく飛び立っては絡み合つたりするのである。そうした彼等を見てゐると彼等がどんなに日光を怡しんでいるかが憐れなほど理解される。とにかく彼等が嬉戲するような表情をするのは日なたのなかばかりである。それに彼等は窓が明いている間は日なたのなかから一歩も出ようとは

しない。日が翳るまで、移ってゆく日なたのなかで遊んでいるのである。虻や蜂があんなにも潑刺と飛び廻っている外気のなかへも決して飛び立とうとはせず、なぜか病人である私を模ねている。しかし何という「生きんとする意志」であろう！ 彼等は日光の中で交尾することを忘れない。恐らく枯死からはそう速くない彼等が！

日光浴をするとき私の傍らに彼等を見るのは私の日課のようになってしまうていた。私は微かな好奇心と一種馴染の氣持から彼等を殺したりはしなかった。また夏の頃にように猛^{たけ}だけしい蠅捕り蜘蛛がやって来るのでもなかった。そうした外敵からは彼等は安全であったと云えるのである。しかし毎日大抵二匹宛ほどの彼等がなくなっていく。それはほかでもない。牛乳の壺である。私は自分の飲みつ放しを日なたのなかへ置いておく。すると毎日決ったようにそのなかへはいって出られない奴が出来た。壺の内側を身体に付着した牛乳を引き摺りながらのぼって来るのであるが、力のない彼等はどうしても中途で落ちてしまふ。私は時どきそれを眺めていたりしたが、こちらが「もう落ちる時分だ」と思う頃、蠅も「ああ、もう落ちそうだ」という風に動かなくなる。そして案の定落ちてしまふ。それは見ていて決して残酷でなくはなかった。しかしそれを助けてやるというような氣持は私の倦怠からは起って来ない。彼等はそのまま女中が下げてゆく。蓋をしておいてや

るという注意もなおのこと出来ない。翌日になるとまた一匹宛はいって同じことを繰返していた。

「蠅と日光浴をしている男」いま諸君の目にはそうした表象が浮んでいるにちがいない。日光浴を書いたついでに私はもう一つの表象「日光浴をしながら太陽を憎んでいる男」を書いてゆこう。

私の滞在はこの冬で二た冬目であった。私は好んでこんな山間にやって来ている訳ではなかった。私は早く都会へ帰り度い。帰り度いと思ひながら二た冬もいてしまったのである。何時まで経っても私の「疲労」は私を解放しなかった。私が都会を想ひ浮べるごとに私の「疲労」は絶望に満ちた街々を描き出す。それは何時になっても変改されない。そしてはじめ心に決めていた都会へ帰る日取りは夙うの昔に過ぎ去ったまま、いまはその影も形もなくなっていたのである。私は日を浴びていても、否、日を浴びるときは殊に、太陽を憎むことばかり考えていた。結局は私を生かさないのであろう太陽。しかもうつとりとした生の幻影で私を瞞せうとする太陽。おお、私の太陽。私はだらしのない愛情のように太陽が癪に触った。裘^{ケモノ}のようなものは、反対に緊^{ストリクト}迫^{ジャクト}衣のように私を圧迫した。狂人のような悶^{ムネ}えでそれを引き裂き、私を殺すであらう酷寒のなかの自由をひたすらに私は欲した。

こうした感情は日光浴の際身体 of 受ける生理的な変化――

——旺^{さか}んになって来る血行や、それに随って鈍麻してゆく頭脳や——そう云ったもののなかに確かにその原因を持つてゐる。鋭い悲哀を和^{やわ}らげ、ほかほかと心を怡^{たの}しめます快感は、同時に重^{おも}苦しい不快感である。この不快感に日光浴の済んだあとなんとも云えない虚無的な疲れで病人を打ち敗^{やぶ}かしてしまう。恐らくそれへの嫌悪から私のそうした憎悪も胚胎^{はいたい}したのかも知れないのである。

しかし私の憎悪はそればかりではなく、太陽が風景に与える効果——眼からの効果——の上にも形成されていた。

私が最後に都会にいた頃——それは冬至^{とうじ}に間もない頃であつたが——私は毎日自分の窓の風景から消えてゆく日影に限りない愛惜を持つていた。私は墨汁のようにこみあげて来る悔恨といらだたしさの感情で、風景を埋めて行く影を眺めていた。そして落日を見ようとすると切なさに駆^おられながら、見透^みしのつかない街を慌^{あわ}てふためにうろろしたのである。今の私にはもうそんな愛惜はなかつた。私は日の當つた風景の象徴する幸福な愛情を否定するのではない。その幸福は今や私を傷つける。私はそれを憎むのである。

溪の向う側には杉林が山腹を蔽^{おほ}っている。私は太陽光線の偽瞞^{いつはり}をいつもその杉林で感じた。昼間日が當つてゐるときそれはただ雑然とした杉の秀^はの堆積^{たいせき}としか見えなかつた。それが夕方になり光が空からの反射光線になるとはっ

きりした遠近にわかれて来るのだった。一本一本の木が犯し難い威厳をあらわして来、しんしんと立ち並び、立ち静まって来るのである。そして昼間は感じられなかつた地域が彼処に此処に杉の秀^は並^なみの間へ想像されるようになる。溪側にはまた樗^しや椎^{すい}の常緑樹に交つて一本の落葉樹が裸の枝に朱色の実を垂れて立つてゐた。その色は昼間は白く粉を吹いたように疲れている。それが夕方になると眼が吸いつくばかりの鮮やかさに冴える。元来一つの物に一つの色彩が固有しているという訳のものではない。だから私はそれを偽瞞^{いつはり}と云うのではない。しかし直射光線には偏頗^{へんぱ}があり、一つの物象の色をその周囲の色との正しい諧調から破つてしまふのである。そればかりではない。全反射がある。日蔭は日表^{ひひょう}との対照で闇のようになってしまふ。なんという雑多な濁濁^{どくどく}だろう。そしてすべてそうしたことが日の當つた風景を作りあげているのである。そこには感情の弛緩^{ちかん}があり、神経の鈍麻があり、理性の偽瞞^{いつはり}がある。これがその象徴する幸福の内容である。恐らく世間に於ける幸福がそれらを条件としているように。

私は以前とは反対に溪間を冷たく沈ませてゆく夕方を——僅かの時間しか地上に駐^{とど}まらない黄昏^{たふし}の厳かな掟^{おきて}を——待つようになつた。それは日が地上を去つて行つたあと、路の上の潦^{みづたまり}を白く光らせながら空から下りて来る反射光線である。たとえ人はそのなかで幸福ではないにしても、

そこには私の眼を澄ませ心を透き徹らせる風景があった。

「平俗な日なた奴！ 早く消えろ。いくら貴様が風景に愛情を与え、冬の蠅を活気づけても俺を愚昧化することだけは出来ぬわい。俺は貴様の弟子の外光派に唾をひっかける。俺は今度会ったら医者に抗議を申込んでやる」

日に当りながら私の憎悪はだんだんたかまってゆく。しかしなんという「生きんとする意志」であろう。日なたのなかの彼等は永久に彼等の恰し（たし）みを見棄てない。壘（た）のなかの奴も永久に登っては落ち、登っては落ちてゐる。

やがて日が翳（かげ）りはじめる。高い椎の樹へ隠れるのである。直射光線（けつ）が気疎（けう）い回折光線（かいせつ）にうつろいはじめる。彼等の影も私の脛（すね）の影も不思議な鮮やかさを帯びて来る。そして私は温袍（ぬい）をまとして硝子窓（しょうじ）を閉ざしかかるのであった。

午後になると私は読書（よみか）をすることにしていた。彼等はまたそこへやって来た。彼等は私の読んでゐる本へ纏わりついて、私のはぐる頁（へ）のためにいつも身体（からだ）を挟み込まれた。

それほど彼等は逃げ足が遅い。逃げ足が遅いだけならまだしも、僅かな紙の重み（おも）の下で、恰（あた）も梁（はり）に押えられたように、仰向けになつたりして藻掻（もが）かなければならないのだつた。私には彼等を殺す意志がなかった。それでそんなとき——殊（こと）に食事のときなどは、彼等の足弱（あしじやく）が却（か）つて迷惑（めいわく）になつた。食膳（しょくたん）のものへとまりに来るときは追う箸（し）をことさらに緩（ゆる）く動（うご）かさなくてはならない。さもないと箸（し）の先で汚

ならしくも潰れてしまわないとも限らないのである。しかしそれでもまだそれに弾ねられて汁（じ）のなかへ落ち込んだりするのがいた。

最後に彼等を見るのは夜、私が寢床（しど）へはいるときであつた。彼等はみな天井（てんじやう）に貼りついてゐた。凝（じ）つと、死んだように貼りついてゐた。——一体脾弱（いぱく）な彼等は日光（にかり）のなかで戯（たわ）んでいるときでさえ、死んだ蠅（は）が生き返つて来て遊んでいるような感じがあつた。死んでから幾日も経ち、内臓（ないざん）なども乾きついてしまつた蠅（は）がよく埃（ちり）にまみれて転（ころ）っていることがあるが、そんな奴（やつ）がまたのこのこと生き返つて来て遊んでいる。いや、事実（じじつ）そんなことがあるのではなからうか、と云つた想像（さうぞう）も彼等（かれら）のみてくれからは充分（じゅうぶん）に許（ゆる）すことが出来るほどであつた。そんな彼等（かれら）が今や凝（じ）つと天井（てんじやう）にとまっている。それはほんとうに死（し）んだようである。

そうした、錯覚（さくかく）に似た彼等（かれら）を眠（ね）るまえ枕（まくら）の上から眺（なが）めていると、私の胸（むね）へはいつも廓寥（くわくりやう）とした深夜（しんや）の気配（けい）が沁（し）みて来た。冬（ふゆ）ざれた溪間（きかん）の旅館（りょくかん）は私のほかに宿泊（しゆくぱく）人のない夜がある。そんな部屋（へ）はみな電灯（でんとう）が消（け）されている。そして夜（よ）が更（よ）けるにしたがつてなんとなく廢墟（はいしよ）に宿（しゆく）っているような心持（こもち）を誘（さそ）うのである。私の眼（め）はその荒（あら）れ寂（さび）びた空想（くうさう）のなかに、恐ろしいまでに鮮（あ）やかな一つの場面（ばめん）を思い浮（う）べる。それは夜深（よこ）く海の香（か）をたてながら、澄（すみ）み透（とお）つた湯（ゆ）を溢（あ）れさせてゐる溪傍（きばう）の浴槽（ゆそう）である。そしてその情景（けいけい）はますます私（わたし）に

廢墟の氣持を募らせて行く。——天井の彼等を眺めていると私の心はそうした深夜を感じる。深夜のなかへ心が抜けてゆく。そしてそのなかのただ一つの起きている部屋である私の部屋。——天井に彼等のとまっている、死んだように凝つたとまっている部屋が、孤独な感情とともに私に帰って来る。

火鉢の火は衰えはじめて、硝子窓を潤おしていた湯氣はだんだん上から消えて来る。私はそのなから魚のはららごに似た憂鬱な紋々があらわれて来るのを見る。それは最初の冬、やはりこうして消えて行った水蒸氣が何時の間にかそんな紋々を作ってしまったのである。床の間の隅には薄うく埃をかむった薬壇が何本も空になっている。何という倦怠、なんという因循(いんじゆん)だろう。私の病鬱は、恐らく他所の部屋には棲んでいない、冬の蠅をさえ棲ませているのではないか。何時になったら一体こうしたことに鼻(はな)がつくのか。

心がそんなことにひっかかると私は何時も不眠に殃(わざわ)いされた。眠れなくなると私は軍艦の進水式を想い浮べる。その次には小倉百人一首を一首宛思ひ出してはその意味を考える。そして最後には考え得られる限りの残酷な自殺の方法を空想し、その積み重ねによって眠りを誘おうとする。がらんとした溪間の旅館の一室で。天井に彼等の貼りついている、死んだように凝つと貼りついている一室で。——

2

その日はよく晴れた温かい日であった。午後私は村の郵便局へ手紙を出しに行った。私は疲れていた。それから溪へ下りてまだ三四丁も歩かなければならない私の宿へ帰るのがいかにも億劫(えいけつ)であった。そこへ一台の乗合自動車を通りかかった。それを見ると私は不意に手を挙げた。そしてそれに乗り込んでしまったのである。

その自動車は村の街道を通る同族のなかでも一種目だった特徴で自分を語っていた。暗い幌(かぶ)のなかの乗客の眼がみな一様に前方を見詰めている事や、泥除けそれからステップの上へまで溢れた荷物を麻縄が車体へ縛りつけている恰好や——そんな一種の物ものしい特徴で、彼等が今から上り三里下り三里の峠を踰えて半島の南端の港へ十一里の道をゆく自動車であることが一目で知れるのであった。私はそれへ乗ってしまったのである。それにしてはなんという不似合な客であつたろう。私はただ村の郵便局まで来て疲れたというばかりの人間に過ぎないのだった。

日はもう傾いていた。私には何の感想もなかった。ただ私の疲労をまぎらしてゆく快い自動車の動揺ばかりがあつた。村の人が背負い網を負って山から帰って来る頃で、見知った顔が何度も自動車を除けた。その度私はだんだん「意志の中ぶらり」に興味を覚えて来た。そして、それは